

寄せあつめられしごとくに菊残る  
大地より起きあがらんと残る菊  
くちづけにわかる鼓動や草紅葉  
幹がくれなる彼彼女神の留守  
小つむじの落葉駈けつゝ燃ゆるなり  
紅葉焚く炎を巫女がいぶかしむ  
ひとたびは高あがりして銀杏散る  
短日や問ひつめられてゐて泣く子  
白らみたる雨の湖面浮寝鳥  
地場の鴨足るはずのなき鴨料理  
鴨高しせんかたなしの網かざし  
村人の目勘定して鴨減りぬ  
いつとなく並ぶ氷の上の鴨

白息の吹きわかれたるうなじかな  
火のごとくほとぼしる息白きかな  
落つる日のまつしぐらなり枯木中  
伝言板寒し片寄せられし文字  
枯葎 弁 当 殻 を 支 え た る  
懸崖菊裏返されて枯れにけり  
枯れてゐてほつたらかさ鉢の菊  
楔噛みたれど二つに割れぬ櫂  
枝ゆらぐ焚火の炎高くのび  
夜焚火にかゞめば円き膝頭  
水皺に灯ををどらして紙を漉く

二〇一七年六月二七日